



7月17日(日)

2016年(平成28年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1  
〒100-8051 電話(03)3212-0321  
毎日新聞東京本社

# 軍反乱の衝撃

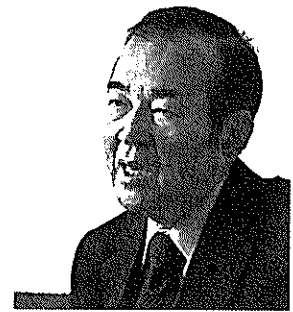
トルコで15日、軍の反乱勢力がクーデターを試み、国内外に衝撃が走った。一時は、首都アンカラや最大都市イスタンブールの一部を占拠し、国営メディアを通じて「全権掌握」を宣言した。欧州と中東をつなぐ地域大国トルコで起きた危機は、いったい何を意味し、何を予兆しているのか――。

# 論点

## 「中東・欧州危機」の恐れ

山内 昌之

明治大国際総合研特任教授



やまうち・まさゆき  
1947年生まれ。東大中東地域研究センター長などを経て現職。著書に「中東国際関係史研究 トルコ革命とソビエト・ロシア」(岩波書店)など。

20世紀のトルコで成功した3回のクーデターは、国内の政治と経済の危機に対して政党政治が難局を開き、国軍への国民のある種の期待感のなかで起きた。軍には国家の柱である世俗主義を守るといふ強い自意識と使命感があり、20世紀の国民はそれを認知してきた。しかし、21世紀最初のクーデターの試みは軍が一枚岩ではなく、国民の期待があったとも思えない。市民に犠牲者も出た。過去の事例とは異なり、軍を挙げて考え抜かれたわけではなく、目的ははっきりしない。

内政や外交の失敗への反発がある。彼に任命された軍最高指導部は別として軍内部に不満が蓄積されていたのは事実だろう。エルドアン氏はトルコ軍と友好的だったイスラエルとの関係を悪化させた。伝統的に慎重に対処してきたロシアとも、戦闘爆撃機撃墜事件などで険悪になった。エジプトやシリアとの緊張関係も増大させた。他国への政治干渉に慎重な従来の政策からすると大きな変化だ。反乱勢力は「一国の平和評議会」と名乗っている。これは初代大統領のムスタファ・ケマル(アタチュルク)以来の「内に平和・外に

平和」という外交安全保障のテーマを思い起こさせる。シリアやクルド問題でエルドアン氏は軍を政治利用してきた。昨年の国政選挙で与党・公正発展党の勢力拡大のためクルドと過激派組織「イスラム国」(IS)を攻撃した。軍の政治利用は禁止手であり、一部将校の間にエルドアン氏への反感が高まったのは間違いない。安定していた外交や安全保障を損ねたエルドアン氏の政局運営への不満が募っていた。

反乱は、エルドアン氏への反対派勢力が想像以上に強いことを示した。不満は内向しても簡単になくならない。トルコの不安定化は中東地域の變動を促し、クルドやISが絡むテロがますます懸念される。トルコはイランと並ぶ安定国家だったが、イランとシリア派勢力の力を強めサウジアラビアなどスンニ派アラブの利益を損なう結果ともなる。反乱の舞台の一つとなったイスタンブールは欧州と中東をつなぐ場所として重

要だ。トルコが不安定化すると難民の問題やテロリストの移動を通して中東と欧州の危機が結合し「中東・欧州複合危機」が深刻化すると考える。テロや難民に加え、政権にとって国内の最重要機構である軍の掌握が重要課題になるだろう。

軍の一部に反乱が起きたことはエルドアン政権の力の限界を露呈させた。ロシアやイスラエルとの関係正常化に乗り出している時期だけに大きな打撃となる。米露との関係やシリア問題でもトルコの立場は弱まり、難民やテロの問題はますます深刻になる。ISが力をつけたきっかけはトルコが武器や人員の通過や送金を許したことがある。

今後エルドアン氏は、ロシアのプーチン大統領型の権威主義的支配を強めようとするだろう。今回の事件を奇貨として米露のような強大な権限を持つ大統領職を目指し、政権の長期化を狙うはずだが、軍はじめ反対派勢力の一掃はそう簡単ではないだろう。【聞き手・及川正也】